

敦煌の佛洞の大體の來歴については茲に筆を止める。この種の美術上の寶庫は、支那にはまだ外にも存在すべき筈である。此等もまた西人の紹介を待つて、初めて世界の學界に浮び出るべき運命の下にあるであらうか、余輩は東方の美術學者の注意と奮起とを切望する。

(佛教美術 第四冊、大正十四年八月)

(編者後記。原著に寫眞版數葉を含み、ペリオ氏の著書等を複寫したものであつた。これ等は當時にあつては珍しい寫眞であつたが、現今になつては多くの寫眞が將來されたので一に省略に従つた。ただ著者の意を汲んで千佛洞なるものの概念を紹介するために、最近に訪中考古學視察團に同行した毎日新聞社員が現地で撮影した全景の南端附近の寫眞一葉を同社の好意によつて挿入することができた。勿論ペリオ氏が踏査した頃とは、外觀に於いても異り、多くの補修を加えられている。)